

インドネシアの伝統薬ジャムウ



農学国際専攻
国際情報農学研究室
あらき たつや
荒木 徹也
准教授

インドネシアには、アーユルヴェーダに由来するジャムウと呼ばれる伝統薬があります。

漢方薬にも似たジャムウが、インドネシアの農村地域でどう利用されているのかを注意深く観察すると、

現代の日本の中山間地域にも当てはまる問題群が浮かび上がってきました。

東南アジアで最大の人口を有する島嶼国家であるインドネシアでは、古くからジャムウと呼ばれるアーユルヴェーダに由来する伝統薬が人々の間で利用されてきました。一方で、インドネシアは近年の経済発展が著しく、2014年にアジア最大規模の国民皆保険制度を導入しました。こうした社会経済的な変化は、農村地域の人々が享受する医療サービスや健康状態にも何らかの影響を及ぼすものと考えられます。

そこで、私たちはインドネシア・ボゴール農科大学の研究者らとともに、西ジャワ州の農村地域におけるジャムウの利用状況に関するフィールドワークを実施しました。その結果、調査した村では、現在もジャムウは村人の健康維持に役立っており、とりわけ女性の産後の健康回復に大きく寄与していることが分かってきました。

一方で、現地でジャムウ師と呼ばれる伝統医療従事者は後継者不足という課題に直面しています。さらに、外国企業による土地の買い占めが村内で相次ぎ、自生する薬用植物を採取することが徐々に困難になりつつあります。このままの状況が続けば、近い将来、村内でのジャムウの原料となる植物の入手が不可能となるかもしれません。近代医療へのアクセスが限られており、かつジャムウの利用者が多い農村地域では、持続可能なジャムウの生産が今後の大きな課題となっています。近代化の進捗が農村に住む人々に及ぼす影響という点では、現代の日本の多くの中山間地域にも当てはまる問題であるといえます。



インドネシアのジャムウ売り。複数のジャムウ原料を調合する。その処方では代々母から1人の娘にのみ世襲される。



現地語でポシヤンドゥと呼ばれるインドネシア農村地域の保健活動施設。主に身体計測などを実施する。



現地語でワルンと呼ばれる小規模な商店では、生活用品や食料品だけではなく、粉末ジャムウをはじめとする市販薬も販売されている。

教えて! Q&A

ジャムウ

古代インドの予防医学であるアーユルヴェーダに由来するインドネシアの伝統薬とされており、ユネスコの世界遺産であるボロブドゥール寺院遺跡群の壁面にもジャムウを調合する様子が残されています。20世紀の前半にはインドネシア国内で粉末のジャムウが販売されるようになり、現在では薬用のみならず健康食品や化粧品等としても利用されています。

インドネシアの国民皆保険制度

日本では1961年に導入された国民皆保険制度ですが、インドネシアでは2014年にアジア最大規模の国民皆保険制度として導入を開始し、2019年までに全国民の加入を達成することを政策目標としています。一方で、どのようにして国民皆保険制度に非正規労働者を取り込むのか、また加入率100%を達成したとして、その後の財源の確保や医療インフラの整備をどう進めていくかがインドネシア政府の今後の課題となっています。



粉末ジャムウの一例(写真は風邪薬)

森から価値を届け、理想の未来を導く



森林科学専攻
森林経営学研究室
なかじま たかお
中島 徹
助教

日本の陸地面積の約7割は森林で覆われ、100年以上の年月をかけて成長していきます。

同時に、森は、伐採によってお金を生むだけでなく、CO₂吸収をはじめさまざまな価値を届けます。

森の生み出す価値を評価し、森林と人間の望ましい関係を築く意思決定を支援するシミュレーションシステムを構築しました。

木の伐採によって生み出されるお金と、森林によって守られる自然環境を、いかにバランスさせるかを研究しています。お金も、自然環境も、どちらも人にとって、大切な価値です。だからこそ、両者をバランスさせるためには、その「価値」を正しく評価しなければなりません。

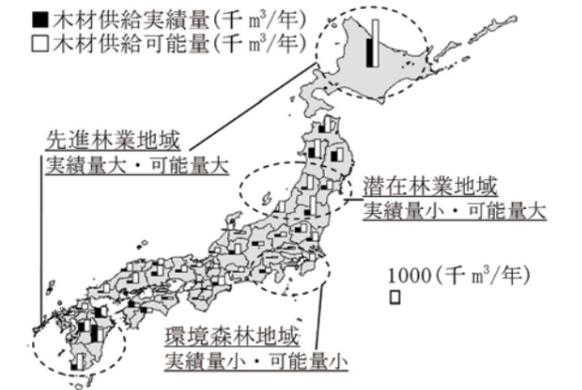
例えば、図で示した日本地図は、森林のビッグデータから膨大な計算をもとに導かれた、伐採によってお金を生む、木材の生産可能量を表しています。平らな地形の多い北海道や、木の成長の速い九州など、経済的に価値の高い木材を多く生み出すことのできる地域が見える化されています。

木は、ゆっくりと成長するので、1年で作物を収穫できる農業のように、林業は、すぐにたくさんのお金を生み出すことはできません。日本の土地面積の約7割という広大な面積を占めていながら、成長に時間を要し、他の産業とくらべ、お金を生む、という点で不利だととらえられがちなのが、森林・林業の特徴です。

しかし、「伐採してお金にできるのは、半世紀後」という林業的な時間スケールを、不利だという経済感覚は、本当に正しいのでしょうか。100年先を視野に入れた、Xプライズ財団の「民間初の有人宇宙飛行に対し1000万ドル」、ポーリング・カンパニーの350km地下トンネルのようなスケールの長期戦略は、今の日本ではなかなか見えてきません。ですが、そういった時空間スケールの戦略は、実は日本にこそ存在したのです。伊勢神宮で神殿を20年に一度新しくしながら(式年遷宮)、お祭りと建造という人為と森からの木材生産を調和させ、1300年もの歴史を伝える。このスケール感は世界でも例をみません。そのような長期戦略に、科学とテクノロジーでリアリティーをもたせるため、例えば、神宮に200年にわたりヒノキ材を安定供給する計画策定の支援システムを構築しました。人の寿命、世代を超えて、森林から価値を届け、自然と人間との理想の未来を導く。そんな価値観も、研究成果のプロダクトとともに、社会へ発信できると期待しています。



森林から生産された木材による神殿の新造
写真：神宮司庁提供



日本の木材の生産可能量の評価



調査対象地の神宮林



御杣始祭

写真：神宮司庁提供